

精神革命と来たるべき新時代

渡辺 久義

宗教の目的は宗教をなくすることだ、とは逆説としてよく言われることである。実際、来たるべき世紀における理想的な新時代を思い描いてみるならば、それは今われわれが宗教と呼んでいるものが、あまりにも当たり前のことであるので、だれも宗教的に考えているとも行為しているとも意識しないような時代であるだろう。宗教とは、その「結びつける」「固定させる」という語源的意味が暗示するように、自らの根源の正しい自覚にほかならない。もしわれわれが正しく教育されるならば、そこには何も特別のものはないであろう。

ところが現状においては、特にわが国において、いまなお一般的なのは、宗教とは何か上から押しかぶせ、押しつけられた虚構あるいは非合理的なものであって、そんなものはなくても同じか、ないほうがよほどました、という認識なのである。これは唯物論的な、あるいは唯物論的に条件付けられた考え方であって、今ではもう時代遅れであるべきはずなのに、相変わらずわれわれの間で優勢なのである。本当のところは、人生に土台と意味を与えるのが宗教なのである。ところが大多数の人はこれを逆さまにして、このままの生活がすでに確固たる土台の上に築かれたものであり、宗教はその上部構造であって、特別に心の弱い人とか、何か変わった考え方をする人にとってだけ必要なものだと思っているのである。

この自分自身の起源についての自覚というものは、われわれの存在のきわめて深いところで起こるもので、見かけ上は何ら変わることはない。けれども実はこれが、個人のレベルにおいても社会のレベルにおいても、決定的な変化をもたらす、われわれの中で起こる革命なのである。それが人間にとて決定的に重要なものであるわけは、人生のあらゆる局面での決定や判断にさいして、無意識のうちにそれが拠り所とされるからである。ちょうど親の愛というものがいかに意識されなくても、社会生活上のひそかな支えとなり導きとなるのと同じである。そしてわれわれは親の愛以上のものを必要としている。

人々の宗教的自覚の覚醒を妨げているものがある。それはわれわれの唯物主義であるが、あまりにも長くこれに条件付けられてきたので、ほとんどその意識がないのである。われわれの世俗的文明の特徴の一つは、無意識の唯物論者を豊富に生み出したことである。そして疑うべくもなく、それはいわゆる「科学」——基本的に唯物論的であり、高く尊敬され、本質的に疑ってみることのない一般の人の心に深く根づいた古いタイプの科学——の影響である。

しかしながら、宗教と反目する科学という古い考えは、最近ますます克服されつつある。そして科学者自身によって多かれ少なかれ捨てられるようになってきた。しかしそれでもなお、長く習性となった精神構造は生き長らえて、要らざる困難や苦しみを生み出していく

るのである。もし宗教についての正しい理解がなければ、必然的に、科学についての正しい理解もない。そしてこの二重の欠陥は、たとえば、その的はずれの論評をも含めて、あのオウム真理教事件のような悲劇を生み出すことにもなるのである。歴史上今ほど、現実についての一つの統合された知識が必要とされていたことはない。

最近の科学の、特に物理学における傾向は、おのれ自らを吟味すること、そして革命あるいは自己革新を自らの上にもたらすことであるように見える。私の理解するかぎりでは、いま科学の内部で進行中のこの革命ないし革新は、特別に人の耳目を引くような発見とか最新流行の理論とかの形ではなく、科学の核心あるいは哲学にかかわる問題として起こっているようである。大ざっぱに言えば、今ゆっくりと進行中のこの動きは、「還元主義」から「全包括論」(holism)へ、あるいはフリチョフ・カプラの言い方で、「エゴシステム」から「エコシステム」(すなわち、エコロジカル・システム)へ、と言い表わすことができる。それは、宇宙を生命をもたぬ機械として見る見方から、宇宙をその目的や計画や意志をもった一つの生命として見る見方への転換である。要するに、それは科学と宗教を統一する方向への動きなのである。

今一般に用いられる「全包括論」ないし「全体論」と訳される holism という言葉は、この新しいパラダイムを理解する鍵を握っているように私には思える。それは還元主義、機械論、原子論、決定論——すべてニュートン的世界観のキーワードである——といった概念に対立する豊かな内包性をもった言葉である。Holism とか holistic とかいう言葉は、ギリシャ語で whole (全体) や entire (完全) を意味する *holos* からきている。しかしここで意味深いのは、この同じギリシャ語から heal (癒す)、health (健康)、hale (元気盛んな)、holy (神聖な) といった言葉が出ていることである。「ホーリズム」という概念はしたがって、すべてこれらの意味を内包的に含んでいると解釈することができる。科学の全体論的パラダイムとは、それゆえ、宇宙を一つの結合一貫した有機的な全体と見るのであるが、その「全体」とは「癒すこと」「健全性」「神聖さ」の意味合いを、すべて含んでいるのである。

現実に対するホーリスティクな接近の仕方は、今まで調和させるのが困難と考えられてきたいくつかの問題を解決するのに役立つだろう。特に医療という問題において、この概念は「障害」というものを全く新しい見方でみることを可能にするだろう。

一般的にこういってもよいであろう。すなわち、西洋医学は患者をみると、もっぱらその病気の部分だけに注意を集中するが、東洋医学は不調和を起こしているその人全体に注意を払い、病気の部分そのものは二次的な重要さしかもたない。ところで、この東洋医学を最も適切に説明できる概念があるとすれば、それはホーリズム、全体論だろう。身体のある特定の部分に病気があるとき、東洋医学はその原因を、まず身体全体に、次に心身複合体に、さらには人間的・自然的環境との複合体に、そして究極的には、その人がそこに埋め込まれている宇宙そのものに、原因を尋ねようとする傾向がある。

これは近代西洋人が夢にも考えたことのない哲学的医療法であるが、にもかかわらず、

宇宙は一つの有機的全体であり、われわれはその中に宇宙的調和をなして生きているのであるから、それは成功するはずであり、現に驚くほどの成功を示してきたのである。そのようなホーリスティックな観点は、すべての「障害」、つまり身体的・精神的病気のような個人的障害から、戦争、宗教間紛争、家庭内紛争といった社会的障害、あるいはオウム真理教事件のような集団狂気にいたるすべての障害を、一つのパースペクティブの中に見通すことを可能にする。これらはすべて、何らかの宇宙の調和の乱れによって引き起こされる病いであり、人間だけがそれに対して責任を負うのである。それらはすべて、エデンの園におけるその原型のように、神のオーダー（秩序、命令）に対する人間の違反によって引き起こされる。この世界のすべての障害は、何か不健全（unwholesome）で神聖をけがす（unholy）ものなのである。

今日最も進んだ科学者たちによって提起されている全体論的パラダイムが、このようにして宗教と科学のみならず、東洋と西洋をも統一へと導くことができるということは、注目に値する事実である。

記憶しておかなければならぬことは、全体論的パラダイムは、現実への還元主義的・機械論的アプローチを排除するものでは全くないということである。後者は方法としては有益であり有効であり、今後もそれは変わらないであろう。重要なことは、還元主義的方法が哲学になってはいけない、われわれを導く世界観になってはいけないということである。ある物をその構成部分に還元すること、あるいはどんな形而下・形而上の対象であっても、そのもののより低い存在のレベルへ還元することは、それを調べるためなら何ら問題はない。けれどもそのように還元されたものを、あたかもそのもの本来の姿であるかのように、すりかえて隠ませてはならないのである。人間は動物である、と言うことはできる。なぜなら人間は動物的側面をもつからである。けれども、人間は動物にすぎない、と言うことはできないのである。

最近、私は、物理学者であり科学の新しいパラダイムの代表的提唱者であるポール・ディヴィズ教授の『宇宙の青写真』を、大学の一般英語の教科書として編纂した。ついでながらこの教科書は、理系・文系両方の学生の熱心な興味を引き付けることができた。著者ディヴィズは次のように言っている。

すべての自然現象がその基本的構成要素の機械的振る舞いに還元されるという科学のパラダイムは、きわめて有効なものであることがわかり、多くの新しい重要な発見へとつながった。にもかかわらず、なにもかも還元してしまうという方法に対する増大する不満、全体的現実はその部分の総和より大きなものであるという感情があった。分析と還元はいつも科学において中心的役割をはたすことだろう。しかし多くの人々は、それが科学の唯一の役割だという考えを受け入れることができないのである。特に物理学においては、総合のあるいは全体論的アプローチが、ある種類の問題を扱うさいには、ますます一般的なものになりつつある。

このことは言い換えるならば、現実を見る二つの方法が相補的でなければならないということである。われわれがその中でいかにしてか生かされているこの現実世界を把握するときに、われわれは二重の眼、二方向を向いた眼、つまり一方は分析と還元に、もう一方は総合と全体性に向けられた眼を持たねばならぬということである。一方は科学に、もう一方は宗教にということもできる。けれどもその場合、この二つの言葉はともにその古い概念の残滓を拭い去られていなければならぬ。その旧来のひとりよがりと、古い暗い恨みを拭われていなければならない。現実世界についてただ一つの健全な(wholesome) 知識があるだけなのである。

ポール・ディヴィズが読者の注意を向けさせようとするのは、イリヤ・プリゴジンとイサベル・スタンジェール共著の『混沌からの秩序』とか、エリッヒ・ヤンツの『自己組織化する宇宙』である。これらの著者たちはその研究から、生命をもたぬ自然をも含めた自然全体はある種の＜自由意志＞をもつということ、そしてそのことによって、いわゆる「ゆらぎ」を通じて新しいもの、新しい秩序を生み出すことができるという結論を出した。ヤンツの次の言葉が引用されている、「われわれはいずれそのうちに、初期条件の盲目的な選択によって決定されるのでなく、部分的に自己決定の潜在力をもつような一つの宇宙の、自己組織化する過程を理解するようになるかもしれない。」

宇宙が自己自身を組織化するものであり、有機体のより高い形態や構造を作り出す力をもっていると言うことは、宇宙に意志や目的を認めるということである。それは神は常に創造の途上にあるということを別の言い方でいっただけである。ヤンツはまた同じ本の中で言っている、「もはや生命を、宇宙の＜中で＞展開する現象として理解することはできない。宇宙そのものがますます生命化し続けているのだ。」

私自身は、宇宙を自己自身に目覚めていく過程にある生命＝意識として、自己開示、自己実現の過程にある生命＝意識として理解したい。人間がこの世界に現われて以後は、人間の心＝脳を通じてそれがなされるのである。だから人間は神がそれを通じて自らを実現しようとする手段である。進化とは神と人との共同の仕事である。

宇宙というものが、あたかも芸術家が自分の中に前もって存在するヴィジョンを実現するために、奮闘しながら一作また一作と創造を続けていくように、自らを開示あるいは実現していく過程にあるとする考えは、私の理解するところでは、統一思想に説かれている考え方である。それはまた多くの科学者や哲学者の抱く宇宙像でもある。物理学者のディヴィド・ボーム、生物学者のフォン・ベルタランフィ、哲学者のベルクソンや西田幾多郎がその例である。ポール・ディヴィズは、「宇宙の開かれていく組織化を芸術家の創造行為に比較している」サイエンス・ライターのルイーズ・ヤングをあげて、彼女の言葉を引用している、「変化と成長を巻き込みながら、宇宙は試行錯誤によって、新しい潜在可能性が現れてくるにつれて、手近の素材を拒否したり手直ししたりしながら進行していく。」

自然界の進化あるいは創造のこのような理解は、いわゆる「目的論」と考えられてはな

らない。なぜなら目的論をもしまりに厳密に解釈するなら、それは時間を逆にしただけの機械論や決定論になりうるからである。いかなる芸術家も前もって、完成された作品の＜明確な＞心像をもってはいない。もしそういうことがあれば、それは創造行為でなく機械的仕事である。プラトンの「イデア」は言うまでもなく、アリストテレスの「形相」でも、あらかじめ存在する明確な最終形体と考えるべきではないだろう。（この考えを目的論から区別するために、ディヴィズは一般に使われる「予定運命」(predestiny) という言葉を使っているが、「予定傾向」(predisposition) の方が好きだといっている。）この点はディヴィズや西田といった人たち、また私自身が著書の中で強調しているだけでない。これは統一思想の主眼点の一つでもある。すなわち、神は実現すべき計画をもっているが、それはいかに人間がそれを知り協力するかによって決まる。

進化を「（花のように）開かれていくこと」(unfolding) と考えるポール・ディヴィズやディヴィド・ボームによって提唱されている考え方には、私には、ダーウィンの自然を機械論的・唯物論的にみる見方に代わって提供された最も説得力ある自然の見方に思われる。『全体性と内蔵秩序』という本の中でディヴィド・ボームは次のように書いている。

それならば、生物学で今日一般に言われているような生命の進化をどう考えるべきなのだろうか。まず第一に、「進化」evolution（これは字義どおりには「展開する」(unrolling) という意味なのだが）という言葉そのものが、あまりにも機械論的な含みがありすぎて、ここではまともに用をなさないということを指摘しなければならない。むしろ、さまざまな生命形態がつぎつぎに創造的に開かれてくる(unfold creatively) というべきである。あとからやってくるものたちは、結果が原因から生ずるというプロセスによって、完全に先にやってきたものたちから出てくるのではない（ある程度近似的には、そのような因果的プロセスがその連続過程のある限られた面を説明できるかもしれないが）。この開示(unfoldment) の法則は、それが一つの射影である広大な多次元的現実を考えに入れなくては、正しく理解することはできない。

結論として言えることは、今日科学はそれ自身の長く身にしみついた唯物論的な思考の方法から自分を救い出そうとしているということである。ポール・ディヴィズの言葉を借りれば「この新しいパラダイムは三百年間の確立された哲学を逆立ちさせることに相当する。物理学者のプレドラク・ツヴィタノヴィチの言葉でいうと＜君の古ぼけた方程式はくず籠に捨てよ、そして雲の繰り返す模様に導きを求めよ＞ということなのだ。要するにそれは、自然の全く新しい記述の方法が始まったということにほかならない。」科学についての古い不健全な概念は、必然的に宗教についての古い不健全な概念とあい携えている。この二つのものを結んで、一つの新しい統合された健全な(wholesome) 知識へと作りかかるような革命が、われわれの心の中で起こらねばならない。